

運営体制

保護者の会(全肢連)

《構成》

- ・一般社団法人 全国肢体不自由児者の会連合会埼玉県支部
- ・各学校の障害者生徒の保護者

《役割》

- ・特に学校外で行われる日常の活動にて生徒のサポート
- ・子供を毎日見る親の視点から企画の安全面などを考慮

《効果》

- ・直接この活動に携わることにより、子供がどのように学校や課外で生活しているのかを把握し→不安を取り除く効果
- ・学校と保護者の繋がりが
- ・保護者のコミュニティ拡大→助け合い
- ・どのような点に留意して保護者と連携を図ったらよいか連携がとれる



41

運営体制

事務局



- ・顔合わせ
- ・教員・保護者からの声(生徒の現状把握)、スポーツ推進委員による留意点指導
- ・各活動の日時・場所の設定
- ・学生ボランティアの企画発表
- ・代表者による検討会、予算などの確認
- ・ボランティアの募集
- ・参加生徒の健康状態などを把握
- ・活動当日の流れ、留意点の確認



夏は8月、冬は12月のイベント開催に向けて定期的に会議を行う

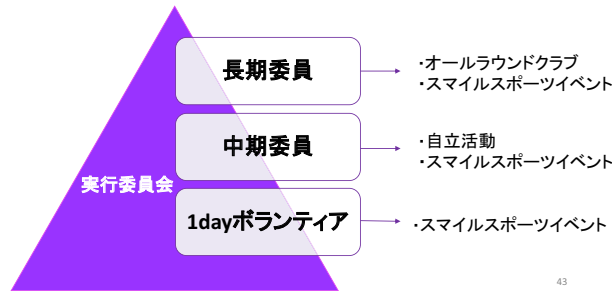
42

運営体制

実行委員会

《構成》

活動に直接参加しサポートする大学生、教員、高校生ボランティア有志の集まり



43

運営体制

実行委員の募集



《呼びかけ方法》

- ・事務局の学生が通う学校へポスターや声掛け
- ・事務局スタッフの知り合いなどへ連絡
- ・Facebookにおいて宣伝

長期委員

- ・条件: ボランティア活動に関心があり、オールラウンドの活動当日に加え最低1回は事前研修に参加できること
- ・募集人数: 10人

中期委員

- ・条件: オールラウンドの活動当日に加え最低1回は事前研修に参加できること
- ・募集人数: 10人

1dayボランティア

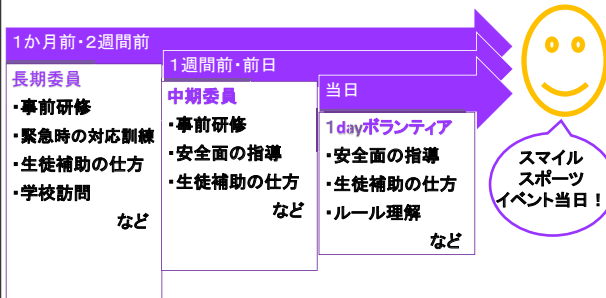
- ・条件: スマイルスポーツイベント当日に参加できること
- ・募集人数: 40人(※生徒参加人数により異なる)

44

運営体制

イベント実行委員の研修

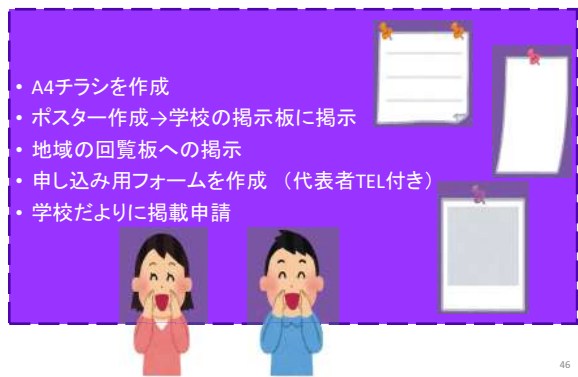
スポーツ推進委員による養成プログラムを実施



45

運営体制

イベント広報

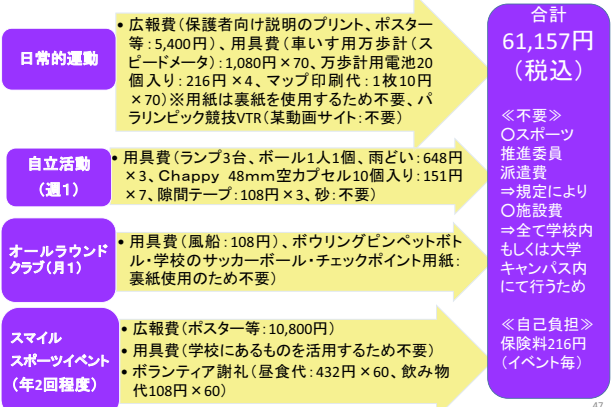


46

運営体制

各活動における運営費

(参加生徒70人仮定)



47

運営体制

運営資金の捻出

各市町村の社会福祉協議会に登録(事務局が中心となり行う)

- ・地域福祉部と連携をとり、活動のアドバイスや運営面の支援を受ける
- ・ボランティア活動振興助成金の申請

☆地域の社会福祉協議会と連携をとることにより、地域住民に対する活動の広報も行える



48

期待される効果

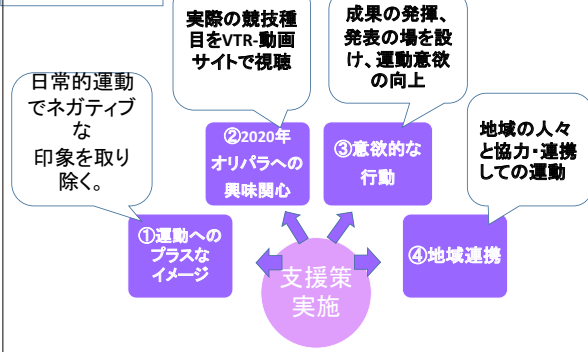
期待される効果



- ①継続的な運動習慣の定着により運動そのものにもプラスなイメージを与えること。
- ②競技をみることによって、2020年東京パラリンピックへの興味関心が高まること。
- ③スポーツから得た自信は日常生活にも好影響を与え意欲的な行動のきっかけになること。
- ④地域に根付いた活動から運動の楽しさだけでなく、社会との壁を払拭し地域との密着が図れること。

49

期待される効果



50



参考文献

- ・和 史朗(2011) 重度障害者を対象としたアダプテッド・スポーツの試み
— 肢体不自由特別支援学校における野球指導を通して —. 北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター年報 第2号p.57-p.62
- ・和 史朗(2015) 肢体不自由特別支援学校に在籍する児童生徒を対象としたベースボール型競技の資料. 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要第6号p.51
- ・和 史朗・松村 美佳子・阿部 達彦・瀧 澤聡(2016) スポーツ活動への参加が肢体不自由特別支援学校の児童生徒とその家族の心理に及ぼす効果 ～ゴロ野球チームへのアンケート調査を通して～. 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要 第7号p.173-p.184
- ・澤江幸則(2015) 障害のある子どもたちと障害のない子どもたちの協働活動の現状と課題. 日本アダプテッド体育・スポーツ学会企画. p.4
- ・杉本久吉 加藤康紀(2015) 特別支援学校(肢体不自由)の現状と課題: 専門性のある人材の育成. 創価大学教育学部・教職大学院.
- ・田添敦孝(2015) 特別支援学校における2020年パラリンピックへの新たな取り組みについて(特別支援学校紹介). 『アダプテッド・スポーツ科学2015』. p.53

52

優秀賞

子どもの遊びに“冒険”を

一橋大学 岡本ゼミ チーム A

○ 田中 喜規 岩淵 智史 高橋溪一郎
 武藤 光平 渡辺 賢人

1. 緒言

(1) はじめに

研究の背景として、「最近公園で遊ぶ子どもの姿を見なくなった。」という生活実感があり、そこから「子どもの体力・運動能力は低下しているのではないか？」といった疑問に至ったことが本研究の契機である。

運動能力と体力には正の相関があると考えられている。バランス感覚や自律神経系、免疫能力といった体力の向上は外遊びによって効果的に発達する。そして、就学後ではこれらの習得は難しい。その為、私たちは子どもの中でも未就学児にターゲットに選んだ。

また、外遊びは多くの子どもたちに与えられるものであり、遊び方を強制されることはない。その為、スポーツなどの運動よりも敷居は低く、より自発性を促すことができる。それゆえ、私たちは「子どもの体力・運動能力の向上」の手段としては外遊びの方がよりふさわしいと考えた。

2. 研究の方法・結果

(1) 文献調査：子どもの体力・運動能力低下の現状とその原因に関する調査

(2) インタビュー調査：子どもの外遊びに関する調査

(3) 文献調査：親の子育ての理解・認識に関する調査

以上の3つの調査を段階的に踏んでいくことで、「子どもの体力・運動能力改善」に対する提言に結び付ける。

表1 調査①文献調査

目 的：子どもの体力・運動能力の低下の現状とその原因

データ元：文部科学省「子どもの体力・運動能力調査」(H26)

「中央教育審議会（第24回）の資料」(H14)

結 果：子どもの体力・運動能力はいくつかの種目を除き、ピーク時の昭和60年頃と比べ、低い水準であることが分かった。原因は、(1)運動機会の減少 (2)生育環境の変化。

この調査結果を踏まえて、原因の背景(真因)を考えてみると、「子どもの外遊びの減少(物理的課題)」は「親や社会の外遊びに対する理解・認識の低さ(精神的課題)」に影響を受けているのではないかという仮説に辿り着いた。外遊びの減少の原因として挙げられる「三間の減少」(現在の子どもたちには「時間」、「空間」、「仲間」が減少していること)も、その背景にあるのは、親の外遊びに関する理解・認識の低さによるものだと考えられる。

ここまですを踏まえて、私たちが解決に向けて必要だと感じたのは、

ア. 親の外遊びの認識を転換できるきっかけを与えられる場所（精神的課題の解消）

イ. それに伴う需要を満たす子どもがのびのび遊べる魅力的な遊び場（物理的課題の解消）

の2点である。この2点を満たす場所として、私たちは『プレーパーク、別名冒険遊び場（以下、プレーパーク）』（注1）に注目した。

そして、プレーパークの現状や私たちのテーマである「子どもの体力・運動能力の低下」の改善に効果があるのかについてインタビュー調査を行った。（下表2）

表2 調査②インタビュー調査

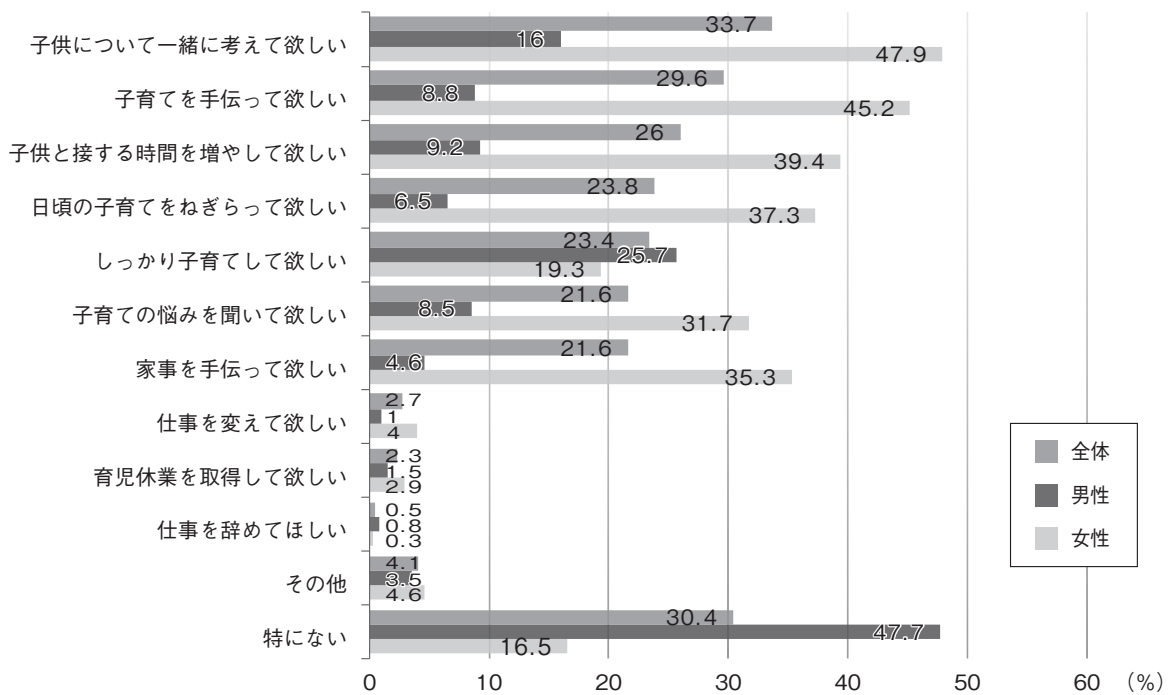
<p>目 的：プレーパークの現状、課題、外遊びの現場の声の把握</p> <p>インタビュー先：7月5日 日本冒険遊び場づくり協会 & プレーパークせたがや（NPO 法人）</p> <p>9月8日 冒険遊び場の会（認定 NPO 法人）</p> <p>得られた知見：</p> <p>(1) 子どもを取り巻く現状に禁止事項が多い中、子どもの自主性、主体性を重んじるプレーパークは、文字通り最後の砦。数は増加傾向（現在約400カ所存在）にある。</p> <p>(2) 外遊びは神経系の統合が自然に図られ、体力の向上につながる。</p> <p>(3) プレーパークが全国的に普及すれば子どもの体力向上は間違いない（日本冒険遊び場づくり協会事務統括理事 天野秀昭氏談）。</p> <p>(4) プレーパークは利用者＝管理者で運営されている。“みんなの公園”という意識。そのため、保護者の満足度が高く、責任問題になりにくい。</p> <p>(5) 外遊びの減少は、親の外遊びに対する相対的な重要度の低さの結果である。</p> <p>(6) コストの問題もあるが最大の課題は知名度の低さ。</p>

インタビュー調査を踏まえると、プレーパークが全国的に普及していくと、子どもの体力・運動能力の改善は図られるが、そこには知名度が低いという課題であるということが考えられる。仮説にもある「親の外遊びに対する理解・認識の低さ」がその理由である。

知名度向上の切り札として私たちが考えたのは、既存のプレーパークの「遊び場」としての機能に、子育ての情報を媒介とする「リアルなコミュニティの場」という新機能を意識的に付加していくことである。以下は、それに関する文献調査である。（表3）

表3 調査③文献調査

<p>目 的：親の子育てに関する理解・認識の把握</p> <p>データ元：日本労働組合連合会「子ども・子育てに関する調査」（2013年）</p> <p>結 果：(1) 子どもを持つことに対する意識調査で、まだ子どもがおらず、欲しくないと回答した20代の約6割が理由として「ちゃんと育てる自信がない」と回答。</p> <p>(2) 子育てで配偶者に望むことに関する調査で、女性側は男性側に対し、半数近くが、「子育てについて積極的に考えてほしい」、と回答。（下図1）</p>
--



出典：日本労働組合連合会「子ども・子育てに関する調査」(2013年)より作成

図1 子育てに関して、配偶者に望むこと（複数回答）
対象：子育てをしていてストレスを感じることがある人

3. 提言

(1) 提言概要

プレーパークのコミュニティ機能を高め、親の理解・認識を高めることによる子どもの運動能力・体力向上に関する提言を行う。提言先としては各プレーパーク。特に、プレーパーク事業に取り組んでいない自治体の場合、自治体とする。

ア. 現在の未就学児を持つ親世代（短期的な政策）

- ・「ママパパ子育て会」を開催（コミュニティ参加のきっかけづくり）

調査③から、主婦側の夫の育児参加に関するニーズは高いことがわかるにも関わらず、夫婦参加型の育児イベントは少ない。そこで、家族でプレーパークに遊びに来る機会をプレーパーク側が企画し、親や子ども同士の触れ合いを通して、子育てや外遊びに対する意識を高めてもらう。また地域の同年代の子どもを持つ親同士の交流を深めてもらう。

- ・「ママ歴、パパ歴制度」を導入

現在のコミュニティは幅広い世代で構成されていて、細分化が出来ていない。一番上の子どもの年齢＝ママ（パパ）歴として、親の層を細分化することで、付き合いが長くなる可能性のある同年代の子どもを持つ親との交流を促進でき、逆に上下の世代間イベントが開催しやすくなる。育児に心もとない新米ママはこうした企画を通じその不安も解消できる。

イ. 将来の親世代（長期的な政策）

・「ボランティア実習」の派遣先にプレーパークを加えてもらう

授業の一環としてボランティア実習という授業を開講している大学がある。実習先にボランティアに行くことで単位を取得できるというものである。この実習先にプレーパークを位置づける。実習により、学生は外遊びに関する知識を身につけるだけでなく、子育てのリアルな現場、親子の外遊びの様子を目の当たりにすることで学生のうちから、結婚や子育てに関して考えるきっかけにもなる。こうした施策に伴い、プレーパーク事業により大きな関心を抱いてもらい、将来的なコミュニティへの参加、またプレーパーク内の学生、親、近隣住民間の地域コミュニティの形成が予測される。こうしたことでプレーパークの人手不足の解消、良いイメージの付与にも効果を発揮するのではないかと期待できる。

(2) まとめ

この提言により、プレーパークの強化が図られることで、遊び場を求める親だけでなく、現実世界にコミュニティを求める親がプレーパークに参加するようになる。そして、外遊びの理解・認識を高めること（精神的課題の解消）で、就学後もプレーパークや既存の公園で子どもを遊ばせるインセンティブを高めることにもつながる。これにより運動機会の向上が期待でき（物理的課題の解消）、子どもの体力・運動能力の改善が図られる。プレーパークの数が増えればその分だけ効果は見込めると考えられる。最終的には今後のプレーパークの拡大、そしてそれに伴う子どもの体力・運動能力の飛躍的改善を期待したい。

注1) プレーパークとは？

「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーにした遊び場である。子どもたちの好奇心を大切に、自由にやりたいことができる遊び場を作ろうということで、1940年（昭和15年）以降ヨーロッパを中心に広がった。

このプレーパークに駐在するスタッフをプレーリーダーと言い、様々な役割がある。

- ・遊びを見守り、子どもがけがをしたり困ったりしたときに、対応する人
- ・子どもの目線に立ち、子どもたちと対等にぶつかり合う大人
- ・子どもの言葉にならない思いを周りの大人に伝える“代弁者”

< 参考文献 >

- ・特定非営利活動法人 日本冒険遊び場づくり協会 HP
<http://bouken-asobiba.org/>
- ・日本労働組合連合会「子ども・子育てに関する調査」（2013年）
<http://www.jtuc-rengo.or.jp/news/chousa/data/20130621.pdf>
- ・文部科学省「子どもの体力・運動能力調査」（H26）
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa04/tairyoku/kekka/k_detail/1362690.htm
- ・文部科学省「中央教育審議会（第24回）の資料」（H14）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/021001a.htm

子どもの遊びに“冒険”を

～プレーパークを活性化させよう～

一橋大学 岡本ゼミ チームA
○田中喜規 岩瀬智史 高橋漢一郎 武藤光平 渡邊賢人

目次

- 1 体力低下の改善には何が必要か？
- 2 プレーパーク
- 3 政策提言
- 4 まとめ

子どもの体力低下

子どもの体力は、昭和60年代のピークに比べて低下傾向にある。
(例)7歳 男女 50m走

出典:文部科学省「子どもの体力・運動能力調査」(H26)

原因は何か？

体力低下データ

福島県では震災の影響もあり、屋外での運動が2010年から制限されていた

福島県教育委員会健康教育部
文部科学省全国体力・運動能力・運動習慣等調査
文部科学省調査よりデータ作成

体力低下の原因

屋外での運動の減少

↓

子どもの体力・運動能力の低下

なぜ屋外の運動機会は減少しているか？

原因

- ①三間の減少
- ②公園の問題

三間の減少

習い事 → 時間の減少
空地の減少 → 空間の減少
少子化 → 仲間の減少

+

+

屋外での運動機会の減少

出典 都市における子供の遊び環境(三間)史規万記 著
筑業女学園大学・筑業女学園大学短期大学部紀要 / 筑業女学園大学・筑業女学園大学短期大学部紀要編集委員会編 p167~177

公園の問題

禁止看板の増加 → 危ない!
うるさい! → 子どもの声 = 騒音 → 苦情 → 魅力減
回転遊具の減少
怪我したら大変!

屋外での運動機会の減少

新聞などでも...

- ・「子供の声は「騒音」か...脅迫、訴訟、保育所そばに「ドクロ」「般若」の看板まで」(産経新聞 2014年10月18日)
- ・公園でのキャッチボールやサッカーは禁止へ 子供が遊びからスポーツの楽しさを知る機会が減少 (ダイヤモンドオンライン 2014年7月22日)

体力低下の改善には何が必要か？ プレバーク 政策提言 まとめ

スポーツではなく

外遊びで解決！

体力低下の改善には何が必要か？ プレバーク 政策提言 まとめ

外遊びのここが重要！

体を環境に適応させる力を養う
自発的である

体力低下の改善には何が必要か？ プレバーク 政策提言 まとめ

なぜ外遊びなのか？

理由①: 誰もが気軽にできる

お金がかからない、ルールがない

➡ 敷居が低く、気軽に参加できる

体力低下の改善には何が必要か？ プレバーク 政策提言 まとめ

なぜ外遊びなのか？

理由②

- 高い所に登る...
- 泥まみれになって遊ぶ...
- 汗をかく...

➡

- バランス感覚UP
- 免疫力UP
- 体温調節機能UP

➡ スポーツだけでは鍛えられない**基礎体力の向上**が期待できる

体力低下の改善には何が必要か？ プレバーク 政策提言 まとめ

なぜ外遊びなのか？

理由①
誰でも気軽にできる

理由②
基礎体力の向上が期待できる

➡ **多くの子どもの基礎体力の向上が可能**

➡ **スポーツにも活かされる**

体力低下の改善には何が必要か？ プレバーク 政策提言 まとめ

ターゲット

ターゲット→**6歳未満の未就学児童**

なぜなら...

この時期までに自律神経系が完成する

そして...**それ以降では改善が困難!!!**

体力低下の改善には何が必要か？ プレバーク 政策提言 まとめ

自律神経系の形成

スキヤモンの発達・発育曲線(スキヤモンの図)

左図より
神経系は、**幼児期**にその大部分が形成される。

➡
幼児期(未就学児童)へのアプローチ

スキヤモンの発達・発育曲線(スキヤモンの図)
www.013-app.so-net.ne.jp/challengesquare/pdf/kidspaper2.pdf
出典: 発育発達と子供のからだ、子供と発育発達(スキヤモン) 高石昌弘 著

体力低下の改善には何が必要か？ プレバーク 政策提言 まとめ

外遊びの減少の真因

外遊びの減少の原因を踏まえると

- ①三間の減少
- ②公園の問題

➡

これが真因なのは？

親や社会が子どもから外遊びを奪っているのではないか!?

➡ **外遊びの機会増加のボトルネック**

体力低下の改善には何が必要か? プレーパーク 政策提言 まとめ

解決への糸口

- 1 子どもがのびのび遊べる場所の創出
=物理的課題の解決
- 2 親の外遊びへの理解の向上
=精神的課題の解決

体力低下の改善には何が必要か? プレーパーク 政策提言 まとめ

解決の切り札となるのが

プレーパーク

体力低下の改善には何が必要か? プレーパーク 政策提言 まとめ

プレーパークとは



第二次世界大戦中の1943年「エンドラップ廃材遊び場」 in デンマーク
↓
怪我の安全対策 ⇒「管理人」を駐在

1970年代に日本に輸入

コンセプト:「**自分の責任で自由に遊ぶ**」
特徴:プレーリーダーと呼ばれるスタッフの存在

×遊びの指導者
○遊びの見守り役
子どもが自由に遊べる環境を整える役割

体力低下の改善には何が必要か? プレーパーク 政策提言 まとめ

プレーパークとは

例) 羽根木プレーパーク in 世田谷

開園時間 10:00~18:00

特徴 禁止事項がほとんどなく 自由な発想で遊べる

休園日 毎週火曜日

運営主体 NPO法人 自治体との協働事業として活動



体力低下の改善には何が必要か? プレーパーク 政策提言 まとめ

公園との比較(例:国分寺プレイステーション)

	所有	遊びの自由度	開放	監督	料金	クレーム先
プレーパーク	私有	○	週6日	プレーリーダー	無料	プレーパーク
公園	公有	△	終日	なし	無料	自治体

体力低下の改善には何が必要か? プレーパーク 政策提言 まとめ

インタビュー調査

プレーパークの現状・有用性について調べるために、プレーパークの第一人者である天野 秀昭 教授に聞いてきました!!



体力低下の改善には何が必要か? プレーパーク 政策提言 まとめ

天野 秀昭 教授のプロフィール

大正大学人間学部人間環境学科子供コミュニティコース特命教授
NPO法人「日本冒険遊び場づくり協会」理事
NPO法人「プレーパークせたがや」理事他

著書:『遊びが社会を変える』/日本冒険遊び場づくり協会編 他

プレーパーク初の有給プレーリーダーとなるなど、プレーパーク事業の開拓者と呼べる人物

現在はプレーリーダーの育成に注力し、プレーパークの活性化を行っている

品川子育てまつり2016 <http://smesse.com/?exhibition=%E5%A4%A9%E9%87%8E%E7%A7%80%E6%98%AD>

体力低下の改善には何が必要か? プレーパーク 政策提言 まとめ

プレーパークの増加とその要因

考えられるプレーパーク増加の背景

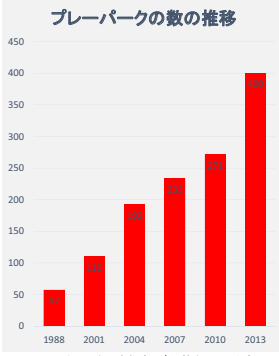
公的機関がプレーパークの遊び環境の必要性を認める

↓

「次世代育成支援対策推進法」「行動計画」「放課後子どもプラン」に必要 → 子どもを育てやすい環境の整備が自治体にも求められるようになった

↓

自治体とプレーパークのニーズが一致したこと増加?



プレーパークの数の推移

参考:厚生労働省 次世代育成支援対策推進法(平成15年法律第120号)、厚生労働省HP

体力低下の改善には何が必要か？ プレーパーク 政策提言 まとめ

プレーパークの子供たちに与える影響

子⇄子の交流の促進

身体性の発達

社会性の発達

25

体力低下の改善には何が必要か？ プレーパーク 政策提言 まとめ

プレーパークが抱える問題

騒音や火遊び等に対して苦情

↓

自由な遊びに制限がでる可能性

↓

プレーパークとしてのアイデンティティが…

プレーパークの社会的な理解の促進が必要！

26

体力低下の改善には何が必要か？ プレーパーク 政策提言 まとめ

「親⇄親の交流」に注目

プレーパークの「遊び場」の機能に加え、「コミュニティ」としての機能を向上

↓

プレーパークの利用者を増やし、知名度を高める

↓

多くの人が関わることで外遊びへの理解が高まる

＝ 精神的課題の解決

27

体力低下の改善には何が必要か？ プレーパーク 政策提言 まとめ

ネットとリアルの比較

★ 1歳5ヶ月の娘さんをもつママさんへインタビュー

情報の信憑性について…

ネットの情報

- 情報が多すぎる(混乱)

リアルな情報

- 特に顔見知りだと信頼度UP
- 取捨選択され、実際に使われた情報でピンポイント

28

体力低下の改善には何が必要か？ プレーパーク 政策提言 まとめ

プレーパークを活性化しよう

自分の責任で自由に遊ぶ

29

体力低下の改善には何が必要か？ プレーパーク 政策提言 まとめ

提言先

プレーパーク → 自治体

↑

コミュニティ機能の向上
↓
知名度up
↓
利用者up

↑

プレーパークの重要性の提唱
↓
左記の改善も組み入れ、実施

30

体力低下の改善には何が必要か？ プレーパーク 政策提言 まとめ

提言案

既参加層のコミットメントの強化

コミュニティへの新規参加

↑

夫婦参加型のイベント
《家族そろっての深い認識》
&
パパ・ママ歴制度の導入
《コミュニティ強化》

↑

プレーパークの教育機関との連携
《プレーパークへの認識の導入》

31

体力低下の改善には何が必要か？ プレーパーク 政策提言 まとめ

子育ての問題

子育てに関して、配偶者に望むこと(複数回答形式)
対象:子育てをされていてストレスを感じることもある人

項目	全体 (%)	男性 (%)	女性 (%)
子供について一緒に考えて欲しい	33.7	16	47.9
子育てを手伝ってほしい	29.6	8.8	45.2
子どもと接する時間を増やして欲しい	26	9.2	39.4
日頃の子育てをねぎらって欲しい	28	6.5	37.3

パーセンテージ

● 全体 ■ 男性 ■ 女性

パパはもっと育児に参加して欲しい

1歳半の子どもを持つ主婦

ママが集まる場には行きづらいのでは？

32

出典 日本労働組合連合会「子ども子育てに関する調査」<http://www.lbc-cengo.or.jp/news/chousa/20130221.pdf>

体力低下の改善には何が必要か? プレーパーク 政策提言 まとめ

夫婦参加型のイベント

親子同士の交流促進 **夫婦で子育てを考えるきっかけ**

★月1回程度から★ママだけではなく、パパを含めた「家族」で参加

33

体力低下の改善には何が必要か? プレーパーク 政策提言 まとめ

夫婦参加型イベント

具体的なプロセス

導入 日曜日 月一で「パパの日」を設定

内容 子どもと共同で木工制作&持ち帰り

効果 コミュニティ強化 & 外遊びの理解促進

パパ参加のハードル下げる

思い出の具体化

定期開催により親子同士の交流促進

勿論ママも参加可能

34

体力低下の改善には何が必要か? プレーパーク 政策提言 まとめ

夫婦参加型イベント

具体例) 竹とんぼ制作

日時 毎月第2日曜日を「パパの日」に設定
10:00~11:00
13:00~14:00 の2回開催

費用 材料費として一つにつき200円徴収

イベント概要

- ・名札を着用(ニックネーム)
- ・自己紹介の機会を設ける
- ・会話を楽しみながら制作
- ・制作後、一緒に遊ぶ

交流の機会を創出

35

体力低下の改善には何が必要か? プレーパーク 政策提言 まとめ

パパ・ママ歴

先輩パパ・ママに相談して、不安を解消したい!

同世代の親子同士の会話で子育ての不安を解消したい!

子育てって何をすれば良いのかな?

「これって、うちだけかしら?」

36

体力低下の改善には何が必要か? プレーパーク 政策提言 まとめ

パパ・ママ歴導入

・一番上の子どもの年齢=パパ・ママ歴

・一歳ごとに設定

目的: 親の層を細分化する

狙い: 同世代の親子同士の交流を図る

・上下の世代間の交流が促進できる

親の層を細分化

パパ・ママ歴4年(4歳児)
パパ・ママ歴3年(3歳児)
パパ・ママ歴2年(2歳児)
パパ・ママ歴1年(1歳児)
パパ・ママ歴0年(0歳児)

様々なイベント企画に活用可能

37

体力低下の改善には何が必要か? プレーパーク 政策提言 まとめ

パパ・ママ歴

具体例) パパ歴2年・ママ歴18年の交流会

⇒パパは育児・家事への取り組み方や、奥さん(ママ)との接し方なども学べる

子育ても夫婦関係も上手いく!!

38

体力低下の改善には何が必要か? プレーパーク 政策提言 まとめ

教育機関との連携

・ターゲットは専門・保育関係の大学生

・大学生が実習の一環としてプレーパークに派遣される(例 ボランティア)

将来保育関係の仕事に就く人へアプローチ!

多くの子ども(保護者)にふれる

広がりを期待

39

体力低下の改善には何が必要か? プレーパーク 政策提言 まとめ

教育機関との連携

大学生 卒業生 62万人

卒業生 4.2万人

保育関連 約半数が保育士に

社会 保護者・子ども 影響 保育士

プレーパークの知名度向上

地域社会における外遊びの理解が高まる

www.huyshyo.or.jp/curriculum_book/reference/27-26-13.pdf
厚生労働省「保育士等に関する関係調査」(H27)
http://www.mext.go.jp/b_menu/houseki/chousa01/shonon/33ku/dk_detail/1354124.htm
文部科学省「学校基本調査」(H26)

40

体力低下の改善には何が必要か？ プレパーク 政策提言 まとめ

教育機関との連携

授業のコンセプト **三本の矢**

- ▶ ボランティア活動・地域交流の促進
- ▶ 子どもと外遊びの理解促進
- ▶ 自己形成のきっかけづくり

授業参加の動機付けとなる

体力低下の改善には何が必要か？ プレパーク 政策提言 まとめ

教育機関との連携

なぜここで自己形成が出てくるのか？

現在の自分 (学生)

過去の自分 (子ども)

将来の自分 (親)

これまでに振り返り、将来のビジョンを描くことが可能

体力低下の改善には何が必要か？ プレパーク 政策提言 まとめ

教育機関との連携

具体的な授業の流れ

講義 (大学内で3回) → 実習 (プレパークで3回) → レポート (実習前にレポート課題提示、実習の一週間後までに提出)

ボランティア

外遊び

プレパーク

- (1) 子どもと外遊び
- (2) 現在に至るまでの自身の振り返り
- (3) ボランティアの意義&将来の自分像

体力低下の改善には何が必要か？ プレパーク 政策提言 まとめ

教育機関との連携

まとめ

外遊びの理解

保育関連の大学生をプレパークに派遣

プレパークの知名度向上

自分の振り返り

将来設計

実現可能性

Ex) 東京女子体育短期大学「ボランティア実習」プレパークとの連携は可能

体力低下の改善には何が必要か？ プレパーク 政策提言 まとめ

提言書の振りかえり

既参加層のコミットメントの強化

コミュニティへの新規参加

夫婦参加型のイベント
《家族そろっての深い認識》
&
パパ・ママ歴制度の導入
《コミュニティ強化》

プレパークの教育機関との連携
《プレパークへの認識の導入》

体力低下の改善には何が必要か？ プレパーク 政策提言 まとめ

期待される効果

体力・運動能力向上

プレパーク増加

利用者増加

知名度向上

外遊びの理解が高まる

精神的課題解消

物理的課題解消



参考文献 改善

- ・ 福島県教育委員会健康教育課 文部科学省全国体力・運動能力、運動習慣等調査 http://www.cms-center.gr.fks.ed.jp/?page_id=1460
- ・ 「冒険遊び場づくり」運動の現状と課題 <https://doors.doshisha.ac.jp/duar/repository/ir/22872/019017020007.pdf#page=2&zoom=auto-13,485>
- ・ 「子どもの体力向上」ホームページ <http://www.recreation.or.jp/kodomo/current/now.html>
- ・ 品川子育てメッセ2016 <http://smesse.com/?exhibition=%E5%A4%A9%E9%87%8E%E7%A7%80%E6%98%AD>
- ・ 「冒険遊び場づくり活動団体の活動実態とその経年変化」梶木 典子
- ・ 「冒険遊び場づくり活動団体の活動実態とその経年変化」 http://ci.nii.ac.jp/els/110009852441.pdf?id=ART0010369011&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1465203926&cp=#page=1&zoom=auto-178,848
- ・ “幼児の身体表現としての運動遊びと体力・運動能力との関係” 高橋和子、角南良幸、瀧 信子 著 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afidfile/2015/10/13/1362687_02.pdf
- ・ 日本冒険遊び場づくり協会 http://bouken-asobiba.org/modules/play/index.php?content_id=10
- ・ 厚生労働省HP <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/jisedai-suisinhou-gaiyou.html>

参考文献

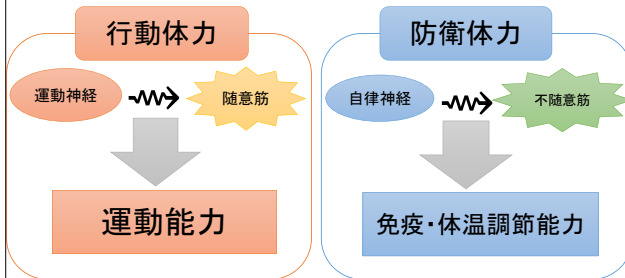
- ・「子供の声は「騒音」か...脅迫、訴訟、保育所そばに「ドクロ」「般若」の看板まで」産経新聞 2014年10月18日
<http://www.sankei.com/premium/news/141018/prm1410180003-n4.html>
- ・公園でのキャッチボールやサッカーは禁止へ
子供が遊びからスポーツの楽しさを知る機会が減少
(ダイヤモンドオンライン 2014年7月22日)
<http://diamond.jp/articles/-/56357?page=2>
(私の視点ワイド)少子化問題 子どもにも住みにくい社会 本田和子
朝日新聞2008年10月16日 朝刊



ご清聴ありがとうございました

一橋大学 岡本ゼミ Aチーム

体力について



参考: パナソニックHP 「子供と暮らす住まいのカタチ」
<http://sumai.panasonic.jp/uchitoko/teacher/04.html>

学校内での対策ではダメなのか？

《考えられる理由》

理由①

授業の変更が難しい

→カリキュラムを変える必要や、教員の負担増など、実現性に乏しい

理由②

校庭では自由に運動できない

→公園同様、禁止事項や制約が多い

プレーリーダーについて補足

役割	・子どもの遊びを見守る ・子どもが遊びやすい環境を整える
仕事例	・遊び場のデザイン・ケガの応急処置 ・公園内でのトラブルへの対処・子どもの相談相手になる
雇用形態	・有給の職員(プレーパークせたがやの場合、年収約250万円) ・ボランティアスタッフ
プレーリーダーになるには	・プレーリーダー講習会や養成講座を受講 ・正式な資格などはない

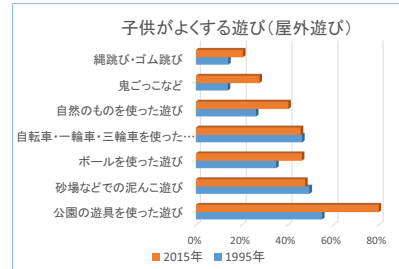
プレーパークせたがやHPを基に作成 (<http://playpark.jp>)

そもそも子どもは外で遊ぶのか

1995年と比較すると、外遊びといえる遊びをする子供の数は増加傾向にある

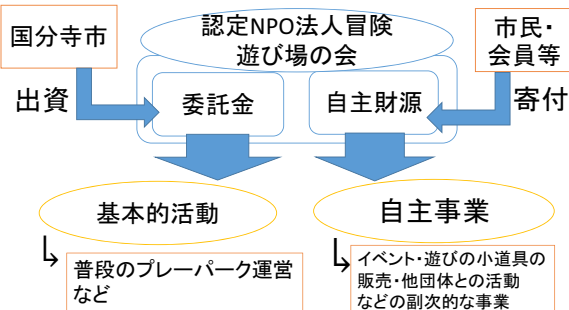


外遊びをしたいというニーズは十分にある？



(ベネッセ教育総合研究所「第五回幼児の生活アンケート-乳幼児を持つ保護者を対象に-(2015)」を基に作成)

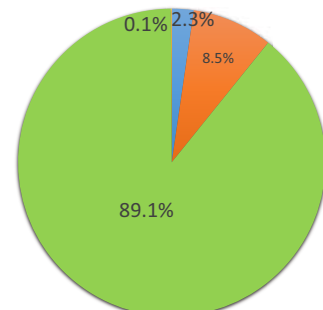
プレーパークを運営するNPOの財源構造例)認定NPO法人冒険遊び場の会



(認定NPO法人冒険遊び場の会HP (<http://boukenasobibanokai.or.jp/about.html>)を基に作成)

認定NPO法人冒険遊び場の会の収入 (H.26)

- 会費
- 寄付金
- 事業収入
- その他の収益



(認定NPO法人冒険遊び場の会平成26年度会計報告より作成)

海外のプレーパーク事情

1943年 世界初の冒険遊び場 エンドラップ廃材遊び場開園(デンマーク)

1945年 アレン夫妻、エンドラップ視察
→イギリスで冒険遊び場運動を隆盛させる
⇒イギリスから各国に波及

1950～1970年代 他国にも普及するようになる

現在、欧州全体で1000か所程度の冒険遊び場(半数がドイツ)がある。
近年、香港やカナダでも冒険遊び場づくりの新しい動きが生まれている。

(参考:日本冒険遊び場づくり協会HP
http://bouken-asobiba.org/modules/play/index.php?content_id=8)

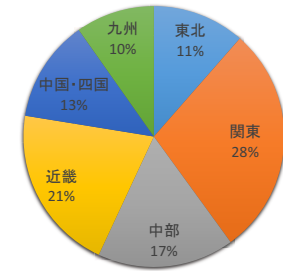
教育機関との連携について

全国に 653か所
(全国に点在)



教育機関との連携は
全国的に普及可能!

保育士育成施設地域別施設数



■ 東北 ■ 関東 ■ 中部 ■ 近畿 ■ 中国・四国 ■ 九州

優秀賞

若い女性のスポーツ実施率向上を目指して

神奈川大学 大竹ゼミ チーム S

○ 斉藤萌恵子 上杉明日香 佐藤 涼菜 白田 亘輝
 鈴木 隼人 高橋 航平 結城 彩花

1. 緒言

近年若い女性の社会進出が注目されるようになり、女性でも職に就いたり、既婚女性がパート・アルバイトに就いたりすることも珍しくなくなった。その一方で若い女性の余暇時間は少なくなり、スポーツ実施率も低迷している。統計局の「社会生活基本調査」によると、20代女性の仕事時間は最も高く、30代女性の余暇活動時間は全世代で最も低い。厚生労働省の「平成26年国民健康栄養調査」によると、運動実施率（1回30分以上の運動を週2回以上実施し、一年以上継続している成人）は男性より女性のほうが低くなっており、世代別では女性の20代と30代が特に低い。さらに、笹川スポーツ財団「スポーツライフ・データ2014」によると運動・スポーツ実施レベルが「レベル0」、「レベル1」の割合が全体の半数を占め、運動を行う機会が減少することで、摂食障害や隠れ肥満といった健康問題につながる恐れがある。20代・30代の女性は学生から社会人、専業主婦など多様なライフスタイルを営んでいる。そのため、20代・30代の女性の運動・スポーツ実施率を上げていくには、それぞれのライフスタイルに応じた政策が欠かせない。本研究では運動頻度を表1のように定義し、実施率を段階的に上げていけるよう、それぞれの特徴を分析し提言する。

表1 運動頻度の Kategorization・政策目標とするレベル別対象

レベル別対象者		目標とするレベル
レベル0 (過去一年間で運動未実施)	➔	レベル低 (年1回・半年に1回)
レベル低 (月に1回程度・週に1～2回程度)	➔	レベル中 (年に1回・半年に1回)
レベル中 (月に1回程度・週に1～2回程度)	➔	レベル高 (週に3～4回程度・毎日)

2. 研究内容

(1) 文献調査：石部真士「運動・スポーツ実施を規定する環境要因に関する研究」(2011)

スポーツ実施における環境要因がどのような影響をもたらすのかを明らかにした。

(2) アンケート調査

- ・対象：神奈川大学学生・ティップネス横浜店利用者・不特定多数の20～30代女性
- ・回収数：241
- ・調査目的：運動習慣別の消費行動、SNSの利用目的の違いを明らかにする。
- ・調査項目：過去一年間における運動習慣、消費行動、SNSの利用目的等。

3. 調査結果

(1) 文献調査

女性の運動・スポーツ実施においてフィットネス系、レジャー系のスポーツ施設が運動・スポーツ実施を促進させうる要因と示唆している。

(2) アンケート結果

①運動を行わない理由

「時間がない」「日々の生活で疲れているから」との回答が40%を超えていた（複数回答可）。また、「一緒に運動する人がいない」との回答も多く、運動をする時間と体力、機会が日常生活の中で確保できていない。

②スポーツブランドへの興味・関心

普段のファッションでのスポーツブランド商品の購入価格は「レベル中・高」よりも「レベル低」の方が高いことがわかった。このことから、運動習慣が「レベル低」であってもスポーツブランドに深く関わっている。

③消費行動における情報源

日常の消費行動における情報源として利用しているものは運動習慣に関わらず「SNS」が多く、参考にしているアカウントは「企業（ブランド）」が70.3%となっている。

④スポーツ実施に求めるもの

スポーツを実施する際の「楽しさ」を重視するといった回答が70.6%、「レベル」、「費用」を重視するといった回答は30%を超えていた（複数回答可）。このことから自分のレベルに合った比較的安価で楽しめるスポーツの機会を求めている。

4. 提言

アンケート結果に基づき、女性の特徴を活かした政策を提言する。

(1) 「レベル0」→「レベル低」

「レベル0」の対象者はスポーツを行わない理由として「時間がない」、「日々の生活で疲れているから」といった特徴がみられる。そこで「レベル0」の対象者に向け、スポーツに触れる仕組み作りを提言する。本提言では女性のタイプを「外向型（興味・関心が自分の外にある）」、「内向型（興味・関心が自分の内にある）」と2つに分けることによって、それぞれのタイプに向け具体的なアプローチをしていく。

(1)－①「外向型」に向けた「ウォーキングスターボックス」の提言

外向型の人には周囲の人間や物事に興味・関心を持ち流行のファッションや、グルメ、話題に敏感である。このような特徴の女性に対しては、流行的なコーヒーショップとウォーキングを組み合わせた事業を今若者に人気のスターボックスで展開する。ネットリサーチ dimsdriven が実施したアンケートでスターボックスが20代・30代女性に最も人気なコーヒーショップであることが分かった。このことから「ウォーキングスターボックス」を提言する。「ウォーカーズコーヒー」というオリジナルのドリンクを販売する。その容器を華やかで女性が好むデザインにすることで、SNSによる拡散・宣伝効果が期待できる。「ウォーカーズコーヒー」を購入した人には他の店舗で使えるクーポン券を配布する。その利用条件として当日に利用すること、対象の店舗（半径1キロ～5キロ圏内の店舗）での利用に限定することで、購入者が他の店舗

に行き着くまで15分以上歩くことができる。対象店舗はクーポン券に記載する。現在都内には284店舗が展開しており、特に若者が集まる渋谷区、千代田区には70店舗が密集している。コーヒーに含まれるカフェインには脂肪燃焼効果があり、自律神経の働きを高め、肥満の予防にも繋がることから運動前のコーヒーはこれらの効果がさらに期待できる。

- ・企業：SNSの宣伝効果により、来店頻度の増加。
- ・参加者：店舗を楽しく散策できるウォーキングと、コーヒーによる脂肪燃焼効果。

※本提言はスターバックスの店舗が多い大都市圏での事業モデルとした。本事業を成功モデルとして、地方で地域に根付いた企業に応用し、全国展開を図る。

(1)－②「内向型」に向けて「恋さんぽ」の提言

内向型の行動パターンの一つとして他人の影響を受けづらく、興味のある分野に対してはとことん探求する傾向がある。興味のある分野から対象者を外へ出歩く(散歩＝ウォーキング)きっかけ作りを展開する。20代のスマートフォン所有率は94.1% (2014年)、30代のスマートフォン所有率は82.2% (2014年)まで増えている。そこで現在若者に人気の恋愛シミュレーションゲームを用いる。トレンド総研の「女性向け恋愛ゲーム」に関する調査では20代・30代の25%の女性が体験したことがあるという結果であった。本提言は以下のような位置情報を使ったゲームアプリ「恋さんぽ」を提案する。

- 1) アプリ内の多様なキャラクターの中で好きなものを選択する。
 - 2) 実際のデートスポットまで行くとその場所にちなんだストーリーが配布される。
 - 3) 一日3km歩くことにより経験値を獲得し、キャラクターへの好感度が上がる。
- ・企業：ウォーキング×恋愛ゲームという新しいかたちのアプリを提供することができる。
 - ・参加者：擬似恋愛を楽しむことでウォーキングの習慣化が図れる。

(2)「レベル低」→「レベル中」

スポーツをする機会はあるが、継続的な実施に繋がっていない人を対象に、スポーツを継続する仕組み作りを提言する。公益社団法人スポーツ健康産業団体連合会(以下JSHIF)でスマートフォンアプリケーションを作成する。

- ①ポイント付与条件として、スマートフォン搭載の万歩計機能使用ウォーキング・ランニングの歩数(2,000歩＝1pt)、公共施設またはフィットネスクラブの利用(1回利用＝5pt)
※1日の上限を10ptとする。
 - ②貯めたポイントは現金に換算し買い物に利用できる。
 - ③アプリ内で自分のスポーツをする際の着こなしを掲載し、投票を行い、順位を決める。
- ・JSHIF：公共施設・フィットネスクラブの利用率向上、スポーツ用品の売上増加
 - ・参加者：自分のスポーツ活動が用品購入まで繋がる。また、自分の着こなしが他人からの称賛を得ることによってスポーツ用品の購入意欲、スポーツに対するモチベーションの向上。

(3) 「レベル中」 → 「レベル高」

スポーツが習慣化しつつある対象者を質の高いレベルでの継続に導くための仕組み作りを提言する。その中で①一緒に楽しむ仲間を作る、②スポーツ・健康の知識を深める、③日頃の成果を発揮する場への参加が効果的である。それぞれの項目に対して以下の取り組みを実施する。

- ①交流大会を開催する。従来のトーナメント方式ではなく、総当たり方式を用いることで、ゲームを楽しみながら仲間との交流を通し、コミュニティが形成される。
- ②スポーツの奥深さを知ってもらうため、「(仮称) 地域健康スポーツ大学」を開催する。行政が地元の大学と連携し、参加者に専門的な知識を学んでもらう。(原則毎月1回の開催:運動生理学、栄養学、トレーニング学等)
- ③日頃の成果を発揮し、評価を得るために既存の大会への参加を促す。
 - ・行政及び競技団体:施設利用率の向上、市民のスポーツ実施率の増加及び競技の普及によって、医療費の削減が見込まれる。
 - ・参加者:スポーツを深く理解し、豊かなスポーツライフを送ることができる。

5. まとめ

全世代を通して最もスポーツ実施率の低い20代・30代の女性のスポーツ実施率を上げるため、運動頻度ごとのレベルを3段階に分けて提言を行った。しかし、「運動が嫌い」、「運動をする必要を感じない」といった対象は十分にカバーできていないという課題も残った。それらのスポーツ実施率をさらに上げていくためには、より詳細な生活環境や、ライフスタイルを分析していく必要がある。本研究の中でレベル別にアプローチをすることは、スポーツ実施率を上げるには非常に適していると確信した。本研究で示した、段階ごとの特徴を活かした政策提言が女性・男性問わず具体的に今後展開されることを期待したい。

<参考文献>


- ・笹川スポーツ財団 「スポーツライフ・データ 2014」
- ・石部真士 「運動・スポーツ実施を規定する環境要因に関する研究 ―日本人 20 歳代・30 歳代に着目して―」(2011)
http://www.waseda.jp/sports/supoken/research/2011_2/5010A009_abs.pdf
- ・厚生労働省 「平成 26 年国民健康栄養調査」
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/eiyou/dl/h26-houkoku-03.pdf>

世界へ、そして未来へ
神奈川大学

若い女性のスポーツ実施率向上を目指して

神奈川大学 大竹ゼミナール チームS

○斉藤 萌恵子 上杉 明日香 佐藤 涼菜 白田 巨輝
鈴木 隼人 高橋 航平 結城 彩花



1

世界へ、そして未来へ
神奈川大学

～目次～

緒言(研究背景・現状・目的)
研究内容(文献・アンケート調査)
調査結果
政策提言
まとめ

2

世界へ、そして未来へ
神奈川大学 緒言

女性の活躍

女性の社会進出
共働き世帯の増加
育児・家事
・
・



3

世界へ、そして未来へ
神奈川大学 緒言

女性の活躍

↑ 仕事時間の増加
↓ 余暇時間の減少

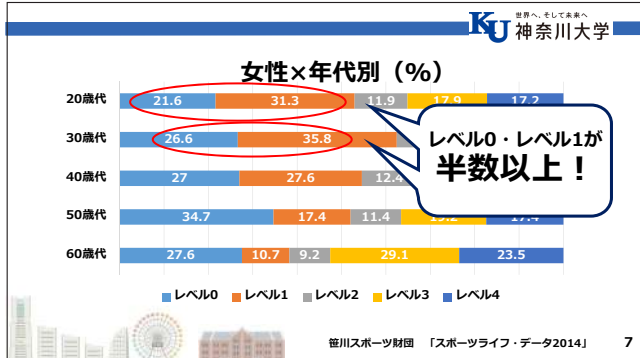
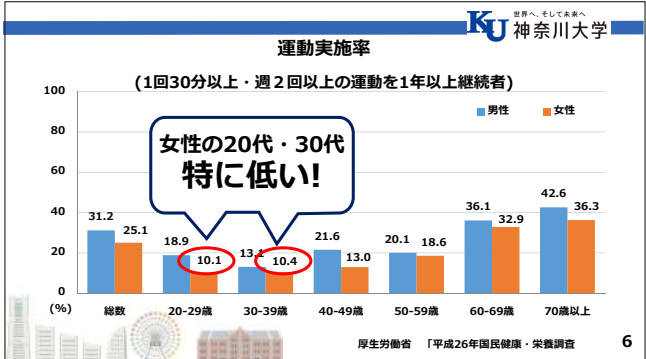
4

世界へ、そして未来へ
神奈川大学 緒言

女性の活躍

運動が出来ない!

5



世界へ、そして未来へ
神奈川大学

研究方針

レベル別対象者	目標とするレベル
レベル0 (過去一年間で運動未実施)	レベル低 (年に1回・半年に1回)
レベル低 (年に1回・半年に1回)	レベル中 (月に1回程度・週に1~2回程度)
レベル中 (月に1回程度・週に1~2回程度)	レベル高 (週に3~4回程度・毎日)

8

世界へ、そして未来へ
神奈川大学

研究方針

レベルごとに適した政策を提言し
段階的 (レベル別) に
スポーツ・運動実施率向上を目指す!

9

世界へ、そして未来へ
神奈川大学

文献調査

- 方法**
 - 石部真士 (2011) 「運動・スポーツ実施を規定する環境要因に関する研究」
- 目的**
 - スポーツ実施における環境要因の影響を明らかにする
- 結果**
 - レジャー施設・スポーツ施設が女性の運動・スポーツ実施促進の要因であると示唆

10

アンケート調査

方法

- アンケート用紙配布
- ネットアンケート実施

計241部回収

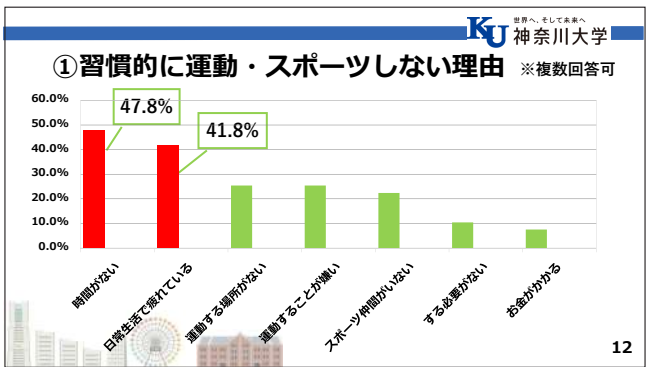
対象

- 神奈川県大学生・ティップネス横浜店利用者・不特定多数の20~30代女性

目的

- 運動習慣、スポーツイベントに求めるもの、消費行動を明らかにする

11



② スポーツブランド用品購入平均金額 (普段のファッション)

	レベル低	レベル中	レベル高
平均金額	14,245円	16,818円	9,920円

↓

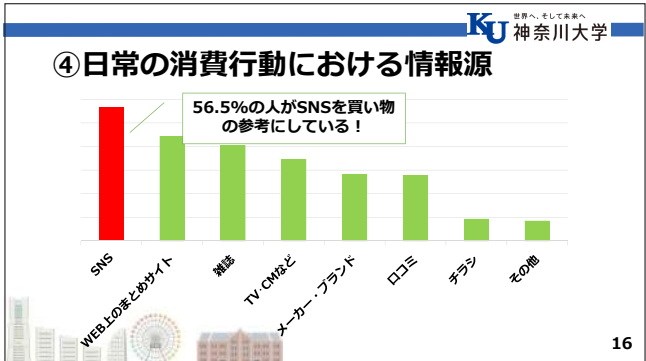
普段のファッションは「レベル高」よりも**運動頻度が低い**「レベル低」「レベル中」のほうが平均購入金額が高い!

14

③ スポーツイベントに求めるもの ※複数回答可

	費用	レベル	特典	立地	知名度	楽しさ	その他
高	14.9%	22.8%	7.9%	5.9%	7.9%	33.7%	6.9%
中	21.2%	15.7%	4.6%	7.8%	3.2%	43.8%	3.7%
低	17.9%	17.0%	5.4%	7.1%	2.7%	45.5%	4.5%

15



政策提言(調査結果に基づく提言)

レベル0→レベル低

運動を行わない理由として、「**時間・体力・機会**」の確保ができていない

➡

ウォーキング × 他分野

日常生活のなかに取り入れスポーツ実施を促す

17

政策提言(調査結果に基づく提言)

レベル低→レベル中

普段のファッションでのスポーツブランドの購入価格「**レベル高**」よりも

➡

スポーツ用品購入意欲を促進する仕組みをつくり、おしゃれにスポーツを継続的に楽しんでもらう。

「レベル低・中」の方が高い!

18

政策提言(調査結果に基づく提言)

レベル中→レベル高

スポーツイベントに求めるもの「**楽しさ**」「**費用**」

➡

比較的**安価**で仲間をつくりながら楽しめる、充実したスポーツライフを望める道筋をたてる

19

政策提言① 「レベル0」 → 「レベル低」

(過去一年間で運動未実施) (年に1回・半年に1回)

対象者の特徴	過去1年運動を全く実施していない人「外向型」「内向型」に区別する
目的	他分野からスポーツを掛け合わせ、スポーツ(ウォーキング)の実施を狙う
提言先	1-①スターバックス コーヒー ジャパン 株式会社 1-②スマートフォンゲームアプリ会社

20

政策提言①「レベル0」⇒「レベル低」

外向型

- ・周囲の人間や物事に興味関心が強い。
- ・流行りのファッションやグルメ、話題に敏感。

内向型

- ・他人の影響を受けづらい。
- ・興味のある分野に対してとことん探究する傾向がある。

21

政策提言①「レベル0」⇒「レベル低」
(過去一年間で運動未実施) (年に1回・半年に1回)

対象者の特徴	過去1年運動を全く実施していない人 「外向型」「内向型」に区別する
目的	他分野からスポーツを掛け合わせ、 スポーツ(ウォーキング)の実施を狙う
提言先	1-①スターバックス コーヒー ジャパン 株式会社 1-②スマートフォンゲームアプリ会社

22

1-②外向型 「ウォーキングスターバックス」

ネットリサーチdmsdriveが実施したコーヒーショップに関するアンケート
最も好きなコーヒーショップに**スターバックスが1位**であり、
特に10代~30代から熱い支持を受けている。

最も好きなコーヒーショップ (%)

スターバックスコーヒー	38
ドトールコーヒー	21.2
珈琲館	5
タリーズコーヒー	4.4
サンマルクカフェ	3.3
カフェローチェ	2.8

スターバックスと回答した人 (%)

男性20代	37.4
男性30代	36.4
男性40代	33.2
男性50代	25.5
女性20代	47.7
女性30代	41.7
女性40代	38.1
女性50代	32.2

23

1-①外向型ウォーキングスターバックス

コーヒーの効果

コーヒーに含まれる「カフェイン」

脂肪燃焼効果があり、肥満の防止につながる。
自律神経の働きを高め、心を落ち着かせる。

運動前にコーヒーを飲むと効果抜群!

24

1-①外向型 「ウォーキングスターバックス」

街歩き × コーヒー →

若い女性の街歩きやショッピングにコーヒーショップのはしごを掛け合わせ、歩行距離を延ばすと共に、普段の街歩きをより楽しいものにしてほしい。

25

1-①外向型ウォーキングスターバックス

- ・「ウォーカーズコーヒー」というドリンクの販売。
好きな味の選択が可能。
- ・女性受けを狙った色鮮やかで可愛い限定デザイン容器を作成
→SNSによる拡散・宣伝効果を期待
- ・「ウォーカーズコーヒー」を購入した人にはクーポン券を配布

100円引き
20%OFF
Coupon

26

1-①外向型 「ウォーキングスターバックス」

利用条件

1. 当日に利用すること。
2. 対象の店舗(半径1キロ~5キロ圏内)で利用すること。
※対象の店舗はクーポンに記載

→購入者が次の店舗に行きつくまで**15分以上**歩くことができる。

都内：284店舗
渋谷区・千代田区：70店舗

27

1-①外向型
ウォーキングスターバックス

都心に多く展開されているスターバックスを対象にした事業を提言した。

地方ではこれを事業モデルとしコンビニや地域のスーパーマーケットに応用したい。

28

政策提言1-① 「ウォーキングスターバックス」のメリット

企業	SNSでの拡散による宣伝効果 来店頻度の増加
対象者	店舗を楽しく散策できるウォーキング コーヒーによる脂肪燃焼効果

29

1-②内向型
恋愛シミュレーションアプリ「恋さんぽ」

「恋愛シミュレーションゲーム」 × 「ウォーキング=さんぽ」

↓

恋愛シミュレーションアプリ「恋さんぽ」

女性の4人に1人!

29

1-②内向型
恋愛シミュレーションアプリ「恋さんぽ」

<概要>

- ・位置情報を使った恋愛シミュレーションゲームアプリ
- ・アプリ内にいる好きなキャラクターを選択し、疑似恋愛体験をしながら、外に出かけ散歩をしながら運動する
- ・継続的に外に出かけてもらうように1日3km歩くと好感度が上がる仕組み

31

1-②内向型
恋愛シミュレーションアプリ「恋さんぽ」

<使い方の流れ>

①アプリ内にいる好きなキャラクターを選択する。



32

1-②内向型
恋愛シミュレーションアプリ「恋さんぽ」

②スマートフォンを持って、外に出歩く。



33

1-②内向型
恋愛シミュレーションアプリ「恋さんぽ」

②スマートフォンを持って、外に出歩く。

③スポットされた地点まで歩いていくと、その場所にちなんだストーリーが配布。



34

1-②内向型
恋愛シミュレーションアプリ「恋さんぽ」

<使い方の流れ>

③スマートフォンの画面の中からキャラクターに話しかけられている気持ちになれる。

観覧車きれいだね！
ここまで歩いた
甲斐があったね♡



35

政策提言1-②
「恋さんぽ」のメリット

企業	ウォーキング×恋愛ゲームという新しいかたちのアプリが提供できる
対象者	疑似恋愛を楽しむことでウォーキングの習慣化が図れる

36

政策提言②「レベル低」⇒「レベル中」
(年に1回・半年に1回) (月に1回程度・週に1~2回程度)

対象者の特徴	スポーツをする機会はあるが、継続的な実施につながっていない人
目的	自分のスポーツ活動が用品購入の意欲を高め、他人からの称賛を得ることでモチベーションの向上が期待することができ、スポーツ継続を望む
提言先	公益社団法人 スポーツ健康産業団体連合会(JSHIF)

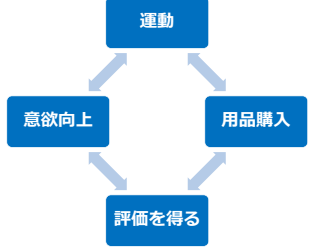
37

政策提言②「レベル低」⇒「レベル中」

<概要>

スポーツ活動(ウォーキング等)によってアプリ内でポイントが貯まり、そのポイントでスポーツ用品が購入できるシステム

女性の特徴を活かし、アプリ内でモチベーションの向上のため取り組みを行う。



38

政策提言②「レベル低」⇒「レベル中」

①運動スポーツをするとポイントが貯まる。

(2000歩=1ポイント 施設利用=5ポイント) **1日10ポイントが上限**

1日20000歩歩いて10Pt

10000歩で5Pt
フィットネスクラブ利用で5Pt
合計で10Pt



39

政策提言②「レベル低」⇒「レベル中」

②貯めたポイントは現金に還元し、欲しいスポーツ用品を購入することができる。

自分が欲しかったものがポイントで手に入る！



40

KU 神奈川大学

政策提言② 「レベル低」⇒「レベル中」

③自分の着こなし・ファッションをアプリ内投稿し、他人からの評価を得る。

撮った写真を投稿する

41

KU 神奈川大学

政策提言② 「レベル低」⇒「レベル中」

④投稿したもので順位をつけ、モチベーション向上をねらう。

モチベーションUP! ↑↑

42

KU 神奈川大学

政策提言②のメリット

JSHIF	公共施設・フィットネスクラブの利用率向上 スポーツ用品の売上増加
対象者	用品の購入意欲、モチベーションの向上

43

KU 神奈川大学

政策提言③ 「レベル中」⇒「レベル高」

(月に1回程度・週に1~2回程度) (週に3~4回程度・毎日)

対象者の特徴	スポーツが習慣化しつつある人
目的	質の高いレベルでの継続に導くための仕組み作り コミュニティの拡大と成果発揮
提言先	行政、大学、各競技団体

44

KU 神奈川大学

政策提言③ 「レベル中」⇒「レベル高」

STEP1 仲間作り

STEP2 知識を深める

STEP3 競技レベル向上

45

KU 神奈川大学

政策提言③ 「レベル中」⇒「レベル高」

STEP1 仲間づくり

「交流大会」の開催

- 行政主催のコミュニティ形成、拡大を目的とした大会
- 複数人での参加を条件とし、他の複数人チームと混合することでよりコミュニティの形成を図る

46

KU 神奈川大学

政策提言③ 「レベル中」⇒「レベル高」

STEP2 知識を深める

スポーツの奥深さを知り、よりスポーツを楽しく!

↓

- 「地域健康スポーツ大学」の開催
- 概要：地元の大学と提携し、専門的な知識を学んでもらう
原則毎月1回の開催とする
スポーツ・健康に関する幅広い知識を学ぶ
(栄養学、生理学、トレーニング学等)

47

KU 神奈川大学

政策提言③ 「レベル中」⇒「レベル高」

STEP3 競技レベル向上

真剣勝負を通じた能力の発揮で、モチベーションを上げよう!

↓

- 各競技団体が開催している既存の大会への参加を促す
- 概要：日頃の成果を発揮し、評価を得るために積極的な大会参加

48

KU 神奈川大学

政策提言③ 「レベル中」⇒「レベル高」

STEP1 仲間作り

STEP2 知識を深める

STEP3 競技レベル向上

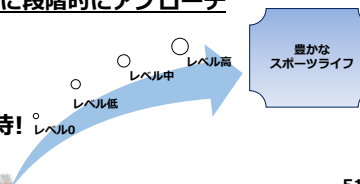

49

KU 神奈川大学

政策提言③のメリット

行政	施設利用率の向上 スポーツ実施率の増加による医療費の削減
各競技団体	競技普及・競技レベルの向上
対象者	スポーツを深く理解し、豊かなスポーツライフを送れる

50

<p style="text-align: right;">世界へ、そして未来へ 神奈川大学</p> <p>まとめ</p> <p>今回、最もスポーツ実施率の低い20代30代の女性の実施率を上げるため</p> <p>運動頻度ごとにレベル別に段階的にアプローチ</p> <p>より細分化</p> <p>↓</p> <p>男女問わずに運動頻度の底上げを期待!</p>  <p style="text-align: right;">51</p>	<p style="text-align: right;">世界へ、そして未来へ 神奈川大学</p> <p>参考文献</p> <ul style="list-style-type: none"> ・厚生労働省 「みんなのメンタルヘルス」摂食障害患者数推移 > http://www.mhlw.go.jp/kokoro/specialty/detail_eat.html ・厚生労働省 「平成26年国民健康栄養調査」 > http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/eiyou/dl/h26-houkoku-03.pdf ・笹川スポーツ財団 「スポーツライフ・データ2014」 ・石部真士 「運動・スポーツ実施を規定する環境要因に関する研究 ―日本人20歳代・30歳代に着目して―」 > http://www.waseda.jp/sports/supoken/research/2011_2/5010A009_abs.pdf ・総務省 「情報通信白書」 > http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/pdf/n4_200000.pdf ・統計局 「平成23年社会生活基本調査」 > http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/pdf/houdou2.pdf <p style="text-align: right;">52</p>
<p style="text-align: center;">ご清聴ありがとうございました。</p>  <p style="text-align: right;">53</p>	

優秀賞

ボールで遊べる公園づくり

明治大学 高峰ゼミナール

○ 七山諒太郎 岡本みさと 菊池真緒子
後藤 滉平 立川 晶子

1. はじめに

日本では多くの人が中学校期から部活動を通じてスポーツを始めている。その前段階として小学生のときの遊びや運動の場としては、公園がその役割を果たしている⁽⁷⁾。しかし、公園については最近、子どものけがや騒音問題などによって利用に際して様々な制限があると言われている。そこで、私たちは市役所への取材や子ども達へのアンケート調査などを行い、それらの調査から子ども達が様々な制約を受けることなく公園で遊べることを目指した政策を提言したい。

2. 保護者と小学生を対象とするアンケート調査の結果

まず、小学生がどれくらい公園で遊んでおり、保護者も含めて公園に対してどのような要望を持っているかを把握するために、都内の公立小学校に通う小学生と保護者を対象とするアンケート調査を行った。調査時期は2016年8月、調査対象は中野区立A小学校全校生徒（291名）とその保護者（291名）である。最終的に生徒184名と保護者184名から回答を得た。

【子どもからの回答】

- 「公園で遊んでいるか？」

遊ぶと回答したのは90.2%、遊ばないと回答したのは9.2%で、ほとんどの小学生が公園で遊んでいるという結果が出た。

- 公園で何をして遊んでいるか

公園で遊んでいる子どもの60.3%が遊具で遊んでおり、38%がボール遊びをしているという結果が出た。このことから遊んでいる子どもの多くが遊具もしくはボールで遊んでいることが分かった。

- 公園で禁止されていること

上位をサッカー、野球、ドッジボール等のボール遊びと大声が占める結果となった。

- 身の回りの公園についての要望（自由記入）

身の回りの公園への要望としては「遊具を増やしてほしい」「ボール遊びができるようにしてほしい」「もっと広い公園がほしい」などの意見が多く寄せられた。

【保護者からの回答】

• 公園に満足しているか

満足していると回答したのは41.3%、満足していないと回答したのは53.8%で、保護者からの視点では満足していないという意見が多少上回った。

• 公園の利用について区や自治体での取り決めはあるか（自由記入）

区や自治体での取り決めについては、「ボール遊び禁止」「花火禁止」「大声などの騒音禁止」などの意見が寄せられた。

• 公園についての要望（自由記入）

公園についての要望については、「遊具を増やしてほしい」「ボール遊びができるようにしてほしい」「のびのび遊べるスペースがほしい」などの意見が寄せられた。

以上、対象は都内のただ一つの公立小学校ではあるが、小学生の大半が公園で遊んでおり、ボール遊びができる公園を作って欲しいこと、保護者が公園の現状に満足していないことが分かった。そこから保護者を含めた住民の公園に対する要望を把握することができた。

3. 公園の区分について

都市公園は国土交通省による「都市計画法」に基づいて設置されている。都市公園は住区基幹公園、都市基幹公園、大規模公園に分けられており、その中で子どもが徒歩圏内で行ける公園が住区基幹公園である。さらに住区基幹公園は街区公園、近隣公園、地区公園に分けられる⁽⁴⁾。

表1 東京都の住区基幹公園の数⁽⁵⁾

公園の種類	街区公園	近隣公園	地区公園
数	2,963	102	20

この表より、最も数が多く子どもたちが行きやすい公園は街区公園であるといえる。今回私たちは子どもの公園遊びについて検討するが、その際の子どもは小学生を、公園はこの住区基幹公園の中でも比較的面積が小さい街区公園と近隣公園を指す。

ところで、街区公園と近隣公園ではかなり面積に差があり、0.25haを設置基準とする街区公園では遊ぶための十分な広さが確保されていないように感じる。アンケート結果より、子どもが公園で行う遊びの中で遊具遊びの割合が半数を占めていたことから、ボール遊びが禁止されている公園では遊具で遊ぶことも考えられる。遊具についての調査を行うと、公園に設置される遊具には、設置する際に基準があることが判明した。

4. 遊具の設置

都市公園に遊具を設置する際には、平成26年6月に国土交通省が提起した「都市公園における遊具の安全確保に関する指針」に記載されている遊具の安全領域というものに則って行わなければならない。安全領域とは、遊具の安全な利用行動に必要とされる空間を意味し、この範囲には重大事故に結びつくような植栽や照明灯などの障害物や、石やガラスなどの異物、凹凸や固い設置面があってはならない⁽³⁾。公園には遊具のほかベンチや木々を設置するともあるが、大きい遊具をひとつ設置すると、面積の小さい街区公園には他

の遊具や設備を整えられないという現実がある。アンケートの結果から子どもが遊具以外に行う遊びとしてボール遊びが考えられる。次章では公園でのボール遊びについて触れていく。

5. ボールの使用

街区公園ではボールの使用が禁止されているところが多く、したがってボール遊びができない場合が多い。そのような問題に対し、私たちは遊具が設置してある公園は遊具の使用に限定し、遊具を設置していない公園をボール遊び等その他の遊びに限定するという方法を提案する。この方法には先例があり、足立区と船橋市の公園の管理がそれにあたる。

足立区ではインターネットにボール遊びのできる公園を掲載し、いくつかの禁止事項はあるものの、それぞれの公園にある設備（バスケットリンクの有無、少年野球・サッカー兼用等）の紹介を行っている⁽¹⁾。船橋市では同市が開催している「こども未来会議室」で2015年度、各参加校の代表からボール遊びができる公園の要望が出された。そのため市は、平成28年9月1日から11月30日までの期間、市内5公園で試行事業を実施することを決定した⁽²⁾。試行事業を実施している公園で、ボール遊びを行うことのできるエリアのことを「多目的広場」という。また、ボール遊びができる市内の公園は近隣公園に該当するものが多い。しかし、5公園の中でも3箇所の公園の「多目的広場」の面積は街区公園の面積に相当する。こうした事例から、遊具のない街区公園程度の規模の公園をボール遊びが可能な公園として運用していく事が可能であると考えられる。

6. 大声などの騒音問題

子どもが街区公園などの公園で遊ぶ際に問題になるのが騒音だろう。花火や爆竹、大音量でのダンスミュージックなどは騒音であると考えが、公園で遊ぶ子どもたちの声や走り回る音は騒音といえるのだろうか。この点については、ドイツで「連邦イミシオン防止法を改正案」（乳幼児、児童保育施設及び児童遊戯施設から発生する子どもの騒音への特権付与）が可決されたという例がある⁽⁶⁾。内容は以下の通りである。

ドイツ連邦議会は2011年5月26日、「連邦イミシオン防止法を改正案」（乳幼児、児童保育施設及び児童遊戯施設から発生する子どもの騒音への特権付与）を可決した。騒音被害については、現状では騒音によって被害を被った場合は賠償請求を行うことが認められているが、今回の法案は、子どもが発する騒音に特権を与え、このような騒音を理由として賠償請求がなされることがないようにしたものである。

ドイツのように公園での子どもによる騒音をめぐり訴訟を起こすということは日本では多くないと思われる。しかし他方で、苦情と行政対応により、子どもが公園で遊ぶことに制限が多くなりつつある。子どもの遊びをどのように社会が支えるかという点で、このドイツの法改正は参考になる。

以上の問題点を把握した上で、私たちは街区公園と近隣公園で遊ぶ子ども達が、ボール遊びができ運動不足や体力低下を改善すべく、十分な運動ができるよう以下の政策を提言する。

7. 政策提言

提言①：ボール遊びができる公園の一般化

足立区、船橋市の前例を参考に、街区公園、近隣公園の関係なく、まずは遊具があるかないかで分類する。遊具がある公園の場合、主に遊具を使った遊びを目的とした公園とする。他方、遊具がない公園の場合は多目的スペースとして公園を開放し、道具の持ち込みは制限しないが、その公園の規模に合わせたボールの種類の制限を検討していく必要がある。ただし、公園の利用者は子どもに限らないため、その地区の子どもの下校時間や利用頻度を考慮し、回数や時間を定める必要があると考える。一度に大勢の人が自由に憩える場としては比較的大きい面積が必要であるため、徒歩圏内にある地区公園にその役割を担うという公園の役割分担をすることが必要であると考え。ボールを使用するにあたっての安全管理は、原則参加者の自己責任であるが、この政策を実施する各区の公園緑地課と町会、自治体、その他関係団体や保護者による連携した実施体制が必要である。


提言②：子どもが遊ぶ時の音への特権付与

ドイツの例では背景に「子どもから発生する騒音」による訴訟の増加があるが、日本ではまだそのような段階ではない。そのため、子どもが遊ぶ時の音へ特権付与をする新しい条例の制定を提言するが、それに時間制限を設けることを推奨する。現在、スクールゾーンという登下校時に車両の通行を禁止する法律が一般化してきたが、それと同様に公園での子どもが遊ぶ時の音に関して、平日は下校時間から防災行政無線が流れる時間まで、休日は明るい時間帯など、それぞれの区で取り決めて施行する。

以上の提言を実行することによって、子どもが自由に遊べる公園が増加し、子どもたちの健全な育成を図ることが期待される。

<参考文献・サイト>

- (1) 足立区 ボール遊びのできる公園
<https://www.city.adachi.tokyo.jp/koen/ball.html>
- (2) 船橋市 船橋市ボール遊びのできる公園検討委員会
http://www.city.funabashi.lg.jp/shisei/jouhoukoukai/004/02/0132/p043526_d/fil/houkokusho.pdf
- (3) 一般社団法人日本公園施設業協会 遊具の安全領域
<https://www.jpfa.or.jp/activity/kijyun/>
- (4) 国土交通省 公園の種類
http://www.mlit.go.jp/crd/park/shisaku/p_toshi/syurui/
- (5) ミツカン 水の文化センター
<http://www.mizu.gr.jp/images/main/kikanshi/no24/mizu24.pdf>
- (6) 連邦イミシオン防止法
<http://blog.goo.ne.jp/hosakanobuto/e/a30c786112d25003f56c26df4cb10e51>
- (7) スポーツライフデータ
<http://www.ssf.or.jp/research/sldata/tabid/328/Default.aspx>



ボールで遊べる 公園づくり

明治大学 高峰修ゼミナール
七山諒太郎 岡本みさと 菊池真緒子
後藤晃平 立川晶子


目次

- 緒言(研究背景、目的、方法)
- 現状
- 政策提言
- 参考文献



緒言 研究背景、目的

- ◆ 運動・スポーツを行う際に公園を利用した割合は、10歳代では40.5%、4～9歳では58.2%、それぞれ「学校」に次いで第2位（笹川スポーツ財団、2015）
- ◆ 小学生たちが公園で遊ぶことへの制限がある
→騒音問題、ボール遊びの禁止など
- ◆ 現状把握をして子どもたちがより
良い公園環境で遊べるような政策提言をしたい



緒言 研究方法

- ・ 小学生と保護者へのアンケート調査
公園利用の現状把握
- ・ 役所へのインタビュー調査
住民からのクレーム、遊具設置条件の調査
ボール遊びのできる公園の導入の経緯
- ・ インターネットや本を用いての文献調査
都市計画法などのデータ調査


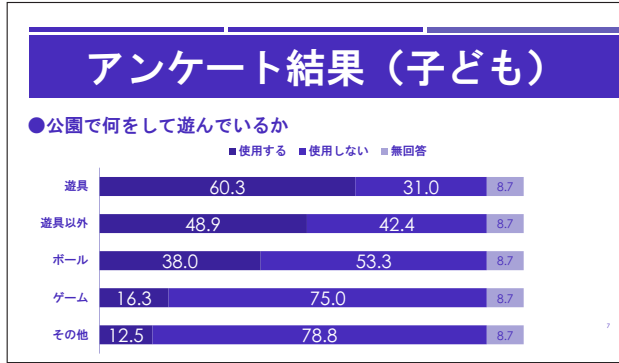
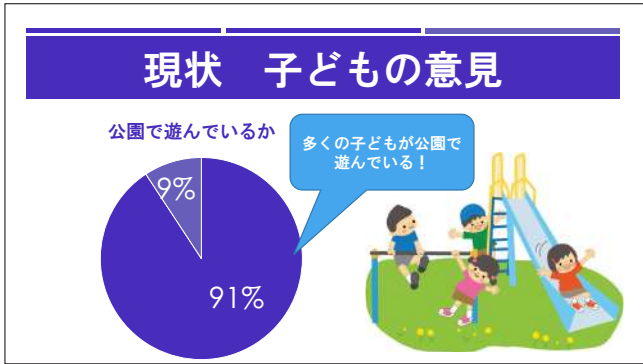


アンケート調査の概要

対象：中野区の小学校1校
全校児童 291名とその保護者

実施期間：2016年8月


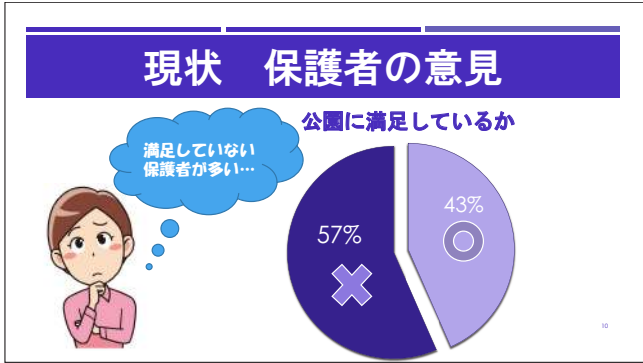
回答人数：児童と保護者各184名

アンケート結果（子ども）

身の回りの公園についての要望

- 遊具を増やしてほしい
- ボール遊びができるようにしてほしい
- もっと広い公園がほしい etc.

アンケート結果（保護者）

子どもの「遊び」についての要望や考え、不安に思っていること

- ゲームばかりしている
- 十分に遊ぶだけの場所がない
- 運動不足、体力低下の心配 etc.



公園が抱える問題点

- ①公園の広さ
- ②遊具の設置
- ③ボールの使用
- ④大声などの騒音



① 公園の区分

都市計画法 (http://www.mlit.go.jp/crd/park/shisaku/p_toshi/syurui/)

住区基幹公園	街区公園	公園までの誘致距離と面積の違い
	近隣公園	
	地区公園	

地区公園（4ヘクタール）



<https://parkful.net/2016/03/park-management-next/>

近隣公園（2ヘクタール）



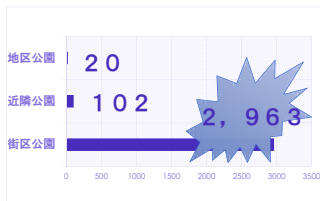
<https://parkful.net/2016/03/park-management-next/>

街区公園（0.25ヘクタール）



<https://parkful.net/2016/03/park-management-next/>

東京都の住区基幹公園の数



定義

公園＝街区公園
子ども＝小学生

ミツカン 水の文化センター <http://www.mizu.gr.jp/images/main/kkanshi/no24/mizu/>

② 遊具の設置と安全領域



一般社団法人 日本公園施設業協会 <https://www.jpfa.or.jp/activity/kijyun/>

安全領域はあらゆる方向に確保する必要があります。

Lは安全領域の範囲
落下の高さ600mm以下の場合の最小値1500mm
落下の高さ600mmを超える場合の最小値1800mm

この範囲には石やガラス等の異物、凹凸や硬い設置面があってはならない。

② 遊具の設置と安全領域

小さい公園には遊具をたくさん置けない...



遊具遊びができないなら、ボールは...?

③ ボールの使用

足立区と船橋市の前例



足立区の取り組みの経緯

もともと公園でのボール遊びは禁止していない

ボール遊びができる公園が欲しいという要望

足立区の公園管理

ボール遊びのできる公園

次の項目を満たした公園を集めて掲載

足立区HPより

ボール遊びのできる公園の概要（足立区）

フェンス 利用時間 夜間施設

ボール遊びのできる公園の概要（足立区）

今後の課題

- ◆ガイドラインの作成
- ◆地域ルール作成
- ◆公園の分散

行政と地域住民の協力！！

公園の分散

ボール遊びのできる公園

中心部分にボール遊びのできる公園がない！！

足立区HPより

船橋市の公園管理

他の人の迷惑になるボール遊び禁止

時代とともに市内に増えた

ボール遊び禁止

船橋市の取り組みの経緯

こども未来会議(2015年度)でボール遊びのできる公園の要望

こども未来会議とは...市内の中学生が船橋市の現状を伝え、子どもたちの視点で船橋の将来について市長と意見を交換し、市政運営につなげていくことを目的としている

市内5公園で試行事業の実施を決定

船橋市の取り組み

- 移動式フェンスの設置
- シルバー人材センターへの委託による見守り
- やわらかいボールの配置
- 市役所内に事務局を設置

船橋市の理想

- 公園のための予算を出さず地域の見守りの中での仕組みの維持
- 業者への見守りの委託を行わずに地域住民で見守る
- 継続するのであれば今後も日時の指定は継続

田喜野井公園

夏見台近隣公園

西船みどり公園 大穴第2号公園 本町4丁目広場公園

船橋市の公園管理

ボール遊びができる市内5公園

- 夏見台近隣公園 8139㎡
- 田喜野井公園 1663㎡
- 大穴第2号公園 1239㎡
- 本町4丁目広場公園 1206㎡
- 西船みどり公園 1124㎡

最も小さい街区公園の大きさは2500㎡

5公園のうち4公園の多目的スペースは街区公園程度
→街区公園程度の面積の公園でボール遊びが可能!

④ 大声などの騒音

子どもの公園での遊び声は騒音といえるのか?

ドイツの例

- ・2007～2008年頃から「子どもの声」を「環境騒音」とする住民による訴訟が相次ぐ
- 多くの場合は子ども側に寛容な判決が出るが子ども側に精神負担が生まれている
- あらかじめ子どもの声に対して特権を与えることで訴訟をなくす

こうして生まれたのが... **連邦イミシオン防止法**

連邦イミシオン法とは

子どもが発する大声、遊戯、かけっこなどの子ども自身の騒音

これらについての訴訟を認めない

政策提言 提言①

ボール遊びができる公園の一般化

分類 → 時間の指定 → 連携

遊具の有無で遊びの種類のカテゴリ 下校時間に合わせた実施時間の設定 地域団体との連携によるリスクマネジメント

政策提言 提言①

ボール遊びができる公園の一般化

連携

- 地域住民
- 行政
- 子ども
- 保護者

政策提言 提言①

子どもと保護者も加えた地域住民と行政の連携

総合的な学習の時間の活用

自分たちでルールを作り、互いに守らせるという社会意識

政策提言 提言①

子どもと保護者も加えた地域住民と行政の連携

総合的な学習の時間は、変化の激しい社会に対応して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることなどをねらいとする重要な役割を果たすものである（文部科学省）

総合的な学習の時間による社会意識の育成

学習課題

- 公園での遊び
- 問題点の把握
- 比較、判断
- ルール作成
- 行政・地域住民との意見交換
- ルールの発信、実行

政策提言 提言②

子どもが遊ぶときの音への特権付与

スクールゾーンを参考とした時間制限つき特権付与

41

政策提言 提言②

子どもが遊ぶときの音への特権付与

スクールゾーンとは...

学校を中心に、登下校時に通学道路の交通制限を行うゾーンの事。



42

政策提言 提言②

子どもが遊ぶときの音への特権付与

ボール遊びができる公園の実施時間に合わせて公園を中心とした範囲で子どもが遊ぶときに発生する音を騒音の対象外とする。



43

政策提言

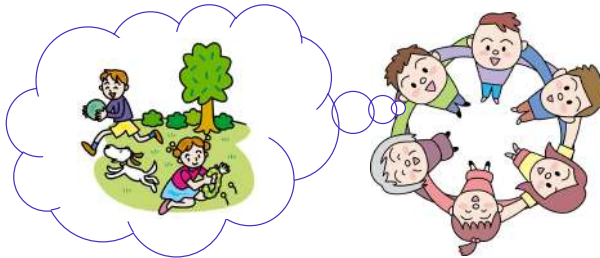
ボール遊びができる公園の一般化

子どもと保護者も加えた地域住民と行政の連携

子どもが遊ぶときの音への特権付与



ボール遊びができる公園をより多く目指して



参考文献

- アエラ 2012年11月26日号 通称イモシオン禁止法 引用
<http://blog.goo.ne.jp/haakanoobu4/e/a00c784112d2500354c26d4cb10e51>
- 足立区 ボール遊びのできる公園
<https://www.city.adachi.tokyo.jp/koen/ball.html>
- 船橋市 船橋市ボール遊びのできる公園検討委員会
<http://www.city.funabashi.lg.jp/hisei/gouhoukouka/004/02/0132/index.html>
- ジュリスト 2011年6月15日号 通称イモシオン禁止法 引用
<http://blogs.com/article/30736/>
- 一般社団法人 日本公園施設協会
<https://www.jpfa.or.jp/act/city/kyun/>
- 国土交通省 都市計画課 公園の種類
http://www.mlit.go.jp/cst/park/haaku/pa_tosh/hyund/
- 文部科学省 総合的な学習の時間
http://www.mext.go.jp/a_menu/shofou/sougou/main14_a2.htm
- PARKFUL 公園の大きさ
<https://parkful.net/2016/03/park-management-next-gen-1/>
- 徳川スポーツ財団(2015) 青少年のスポーツライフデータ 10代のスポーツライフについての調査報告書
- 徳川スポーツ財団(2015) 子どものスポーツライフデータ 4歳-9歳のスポーツライフについての調査報告書

44

ご清聴
ありがとうございました！



明治大学
MEIJI UNIVERSITY

45

優秀賞

スポーツ推進委員の効果的な活動方法を巡って

桐蔭横浜大学 渋谷ゼミ A チーム

○ 本村 彩花 遠藤 颯 中野渡航輝
永田 晴紀 吉原 直矢

1. 緒言

スポーツ推進委員の存在は、あまり知られていない。スポーツ推進委員とは当該市町村における地域スポーツの推進のため、地域住民と行政との仲介役になり、地域住民に密着してスポーツ推進活動を行うものである（平成 23 年法律第 78 号 基本法参考）。すなわち、私たちが生活する地域にはスポーツ推進委員が存在し、地域スポーツの推進に取り組んでいる。しかし、その実態については多くの国民が理解されていない。なぜ理解をされていないのか。私たちは、「スポーツ推進委員がうまく役割を果たせておらず、地域スポーツの推進が行えていない」という実態があるのではないかと考えた。班員の中にスポーツ推進委員の母をもつ者がおり、母の姿を見て育った班員の話をつきかけに今回研究にいたった。

2. 目的

私たちは、スポーツ推進委員がうまく役割を果たせていない原因として、「地域スポーツの推進が行える能力を持った適任者が選ばれていない」、「実際に活動を行うことができない『阻害要因』が存在する」という仮説を立てた。私たちは、仮説より本研究では実態について調査し、結果に基づいてスポーツ推進委員の効果的な活動方法を提案する。

3. 方法

(1) インタビュー調査

- ア. 調査対象者：全国スポーツ推進委員連合専務理事 1 名、N 県 M 市生涯スポーツ係 1 名。
- イ. 調査内容：スポーツ推進委員の役割等の実態把握について。
- ウ. 調査時期：8 月上旬・9 月中旬に実施。
- エ. 手続き：約 2 時間程度の面会と、約 20 分の電話にてインタビューを行った。

(2) 質問紙調査

調査 1

- ア. 調査対象者：2 つの自治体のスポーツ推進委員男性 53 名・女性 49 名（無記名 11 名）、計 113 名
- イ. 調査内容：スポーツ推進委員の抱える問題点や活動にあたっての課題について。
- ウ. 調査時期：9 月中旬に実施。
- エ. 手続き：各市へ、郵送にて質問紙を配布し、回答後返送していただき回収した。

調査2

- ア. 調査対象者：K 県私立大学 2～4 年次生男子 120 名・女子 52 名、計 172 名の学生。
 イ. 調査内容：学生のボランティア活動における意識について。
 ウ. 調査時期：平成 28 年 9 月 26 日に実施。
 エ. 手続き：学生へ質問紙を配布し、回答後回収した。

4. 結果と考察

表1 スポーツ推進委員に対するアンケートの結果

項目	思う	どちらでもない	思わない
スポーツ推進委員に希望してなったか。	29 名 (29.6%)	40 名 (40.8%)	29 名 (29.6%)
「連携調整」の役割をより図る必要があるか。	33 名 (34.0%)	46 名 (47.4%)	18 名 (18.6%)
地域住民への認知度は高いと思うか。	7 名 (7.0%)	21 名 (22.0%)	71 名 (71.0%)
地域住民への認知度を高める必要はあるか。	59 名 (58.4%)	31 名 (30.7%)	11 名 (10.9%)

表2 学生のボランティア活動における意識について

項目	YES	NO
地域の人々にスポーツを推進するボランティアに参加する機会があったら参加するか	141 名 (82.9%)	29 名 (17.1%)

(1) 実態把握でのインタビュー調査

- ア. 全国スポーツ推進委員連合専務理事から、「スポーツ推進委員の今後期待される役割や、活動が盛んな地域」についてお話しいただき、スポーツ推進委員の実態把握と質問紙の地域の選定を行った。
 イ. N 市生涯スポーツ課の方に「実際に行っている連絡調整」をあげていただいたところ、「スポーツイベントに参加している地域住民との関わり合い」のみということが分かった。

(2) 実態把握での質問紙調査

- ア. 「スポーツ推進委員に希望してなったか」の項目では希望してなったと回答しているのが 29 名 (29.0%) という結果が得られた。
 この結果から、「希望していないにもかかわらずスポーツ推進委員として選任されている現状がある」と考察できる。
 イ. 「スポーツ推進活動の頻度」の項目では、月に数回と回答したのが 83 名 (86.5%) であった。活動頻度に対し、「行事が多すぎる」「活動がきつい」等が挙がっており、「月に数回の活動でも負担に感じている人がいる」ことがわかった。

ウ.「本市におけるスポーツ推進委員の地域住民への認知度は高いか」の項目では、高いと思うと回答したのが7名(7.0%)にとどまった。また、「認知度を高める必要があるか」という項目に対しては、あると回答した人が59名(58.4%)となった。

以上のことから、地域住民に対する認知度の低さから、「認知度を上げる必要がある」といえる。

エ.「現在よりも他のスポーツ関連組織や事業との関連を図る必要があるか」の項目では、あまり必要でない(もしくはどちらでもない)と回答した人が59名(65%)であった。

以上のことから、スポーツ推進委員の役割としてこの「連絡調整という活動が軽視されている」と考察できる。

(3) 提言作成での質問紙調査「ボランティア活動における意識」について

K県私立大学の学生に対し、「もし地域の人々にスポーツを推進するボランティアに参加する機会があったら参加するか」という質問に対して141名(82.0%)が「参加したい」と回答している。よって学生に対してのスポーツボランティアの要請は有効であると言える。

(4) 結果のまとめ

結果と考察から、「希望していないが、スポーツ推進委員として選任されている」、「月に数回の活動でも負担に感じている人がいる」、「認知度を上げる必要がある」「連絡調整という活動が軽視されている」という課題が浮かび上がった。「地域スポーツの推進が行える能力を持った適任者が選ばれていない」といった仮説は証明できず、「活動を行うことができない『阻害要因』が存在する」については、活動の負担が大きいこと、認知度が低いことが言える。

以上のことから、現在のスポーツ推進員には人材の確保と活動の際の負担軽減、そして新たに連絡調整という役割の必要性の浸透と、認知度の向上が求められると言える。

さらに、学生への「ボランティア活動における意識」についての質問紙調査では、「地域スポーツの推進のためのボランティア活動が、身近で実施されていれば、学生は参加する確率が高い」ということが分かった。

5. 提言

(1) ボランティアの要請

ア. 地域住民に対して

スポーツ推進委員の担当する市区町村の地域住民に対し、回覧板や地域になじみのある新聞紙の折り込みチラシ、SNS等へ「ボランティア募集のお便り」を掲載し、地域住民へのボランティア参加を呼びかける。

イ. 学生に対して～「スポーツイベントの企画の提案と実施」～

スポーツ推進委員の担当する市区町村の近隣の大学と連携し、大学生対象の「スポーツイベントの企画の提案と実施が体験できるボランティア」を設ける。ここでは地域スポーツにおけるスポーツイベントの企画の提案を学生に任せ、スポーツ推進委員と学生が協力して実施する。スポーツイベントの参加対象者は親子と高齢者を中心に呼びかける。